

房総の近世史研究で著名な故川村優氏は、茂原市の郷土史研究にも大きく貢献しました。その川村氏が一貫して研究したのが、旗本知行地の地域経営です。細かく分かれる旗本知行地の「勝手賄い」について、その著書『旗本知行所の支配構造』(吉川弘文館 一九九一年)などで詳しく論説しています。

さて、何回かに分けて紹介している中善寺村文書にも、領主である旗本の地域経営を示す史料が含まれています。中善寺村は広戸氏・川井(河合)氏の相給後に大久保氏・三雲氏を加えた四給支配で、この文書を伝えた久我家は広戸氏知行地で村役にもついた家と考えられます。今回は、以下の元治元年(一八六四)の史料を紹介し

す。  
乍恐書附ヲ以奉願上候  
中善寺村久我善左衛門奉申上候、  
私義是迄多分之金子拝借仕次第

二借財相嵩難洩至極仕候二付、  
文久三亥年十二月中親類組合を  
以格別之御勘弁を以私所持之田  
畑山林質地証文二仕奉差上候得  
共、殘金之百八拾五兩三分式朱  
者御返済可申上手当茂無御座返  
濟方等閑二付、当夏中数度御催  
促ヲ受依而六月晦日限り之御日  
延申上置候処、御地頭所様御呼  
出二付七月廿七日出府仕候処、  
当月二相成加印之ものとも江巖  
敷御催促則其使僧二帰村之砌途  
中二而□□(糊張跡あり)一円  
申訳ケ茂無御座候、一鉢私義ハ  
先々御地頭所様御動向諸入用  
御差詰り被遊候度毎ニ多分之金  
子御当山様弥拝借仕上納申候得  
共、追々御地頭所様御不如意二  
付、種々無心之旨被仰聞無利息  
年賦又ハ無利息置居或差上切消  
金扨与被仰付難洩至極仕候得共、  
御地頭所様御儀故無拋事与相弁  
罷居候内、家内之ものども病身  
二相成種々相煩又ハ死失仕候も  
のも有之程之仕合難洩相嵩追々  
借財増長仕返済之手当茂無之只  
今二相成御見分意仰之始末尋明  
仕候間、私家内召連御寺領御門  
前大江引越悴栄藏兩人二而存生  
中二勤致昼夜を不厭御奉公仕、  
御厚意相送申上度候間、何卒以  
御慈悲御聞濟被御成下置候様偏

二奉願上候、右願之通り親子共  
御召抱二相成候ハ、当人共者  
不及申二家内一同者勿論加印仕  
候親類組合村役人迄一同難有仕  
合二奉存候、以上  
(以下略)

この時期「御地頭様」すなわち  
広戸家の支出が急増して経営が  
苦しくなり、久我家に「無心」を  
するようになったというもので  
す。これを久我家は「東明山」か  
ら借用してまで充当してしまし  
た。しかし、家内に病気の者も  
出たので、門前に引越して奉公  
して返済したいという内容です。  
「東明山」は現在の中善寺にある  
大東明山行徳寺です。この元治  
元年七月には、禁門の変が京都  
であり、幕府はそれまでも長州  
征討を企画して、多くの負担を  
旗本に求めていたものと考えら  
れます。この史料は、そうした  
旗本が知行地に多額の「無心」す  
なわち緊急経費を賦課していた  
実例を示すものといえますが、  
それになぜ村内の寺院が関与し  
ていたかはこれからの課題です。

茂原市文化財審議会委員

菅根 幸裕

文芸コーナー

俳句

山茶花や優しき漂う冬の華

高橋 良昌

初雪やメールで友の病知り

ポン太

短歌

春が来てあさり料理に舌つづみ

夜はニコニコ酒蒸し造り

時女 礼子

まだ暗き元朝の空淡き黄の

少し歪な月震えており

山本 明美

老い漁師の釣りし鯉が届きたり

房総に移任三日目の朝

菊地ミトリ

川柳

侘び寂びも浮足立っている野点

木内富美子

アナログの昭和を語る忠魂碑

福田 研治

ときめきも急降下する老いの性

藤橋 由裕

孫受験茨の道にサクラサク

道譯 賢一

蛇口から朝のドラマが溢れ出す

吉野千枝子

春が来る春のドラマを背負って来る

今井ひさし

自転車のスマホが怖い白い杖

岡元 邦武

我が家には恵比寿閻魔が鎮座する

風間 敬造

家事仕事嵐のよりにやって来る

仲村美年子

●偶数月は「俳句・短歌・川柳」を、奇数月は「詩」を掲載しています。  
●投稿は楷書でお願いします。作品・氏名にふりがなをふってください。

※俳句・短歌、川柳の原稿送付先  
〒297-8511 茂原市道表1番地 茂原市役所秘書広報課宛「文芸コーナー」と朱書きしてください。